

共儀茂國之大根を申付置ものに候へば、中間同事存、たとへ存念違候而も、幾度も此方より和談可仕事に候間、兼而左様相心得可申候。とかく人々職分に油斷有間敷候。尤大役難勤様に候而も、人々心得を以苦身にも有間敷道理有之様被思召候。就夫志摩と御僉議被成候御物語有之候。度々志摩申候は、御前諸事御事多御苦勞に乍惶奉存候由申に付、其御了簡度々被仰出候得共、此間御了簡被成被仰聞候得ば、志摩かんしん仕候。たとへば粟ヶ崎御鷹野に御出被成刻、近岡道は六郎左衛門、又兵衛杯は度々供にも參覺可有之候。本道よりは近く被思召候。自然近岡道御越被成儀ならず、本道被成御座候へば以之外御退屈被成、遠き様に被思召候。一兩日以前松任口に御鷹野に御出、柏野に而御晝休被成、直に御歸被遊候。道のりは粟ヶ崎本道より遙に遠く候得共、無御退屈近様に被思召候。是に而御了簡被成候。尤御國之御仕置、跡先之儀を思召候得ば、大山を前に御置候様に候得共、又一日〱御職分と思召御勤候得ば、御退屈之儀も無之候は、粟ヶ崎は近岡道之脇道に近き所有之處思召候得ば、本道を遠きやうに御退屈被成候。松任口に而は

本道之外脇道無之に付而、遠く候而茂近き様に御退屈不被成候。然ば人々職分之本道を一筋に相心得、此外脇道無之と工夫いたし候得ば、退屈可有之事に不被思召候。人々職分之外に利欲の道を求め、あるひは安樂の道を求め候得ば、脇道に心ひけ、次第に人々職分之本道くるしみに成行道理に被思召候由被仰聞候得ば、志摩かんしんいたし候と御笑御物語被遊候。とかく各職分一筋に相心得不致油斷、第一無欲に諸事可仕由御咄被遊候。

一、津田宇右衛門儀は、御算用大役相勤候得ば、尤組之儀も第一に被思召候得共、左様には又氣力相續間敷候間、組之儀者少用捨いたし、御算用場第一に可相勤候。其上組之儀は相司茂有之、又中間中有之事に候得者、可致介抱之條御前に而被仰渡候間、少茂無遠慮相心得、皆共のことくに、組之者共之儀は情に入不申候而も、可成様に被思召候間、自分之氣力を致分別、それ程に相勤、少氣分をも養ひ尤被思召候。去共被仰渡意得之儀は、急度相守可申候。其段は御免不被成旨被仰渡候。御條目之品々、組之者共意得之儀は、俄に直し可申儀に不被思召候。年々を以て以來ケ様に

成立候様可仕候。面々心得之儀は、唯今よりも改直可申事候間、急度相勤可然被思召候。其段少も油斷不仕、すみやかに直し可申候。とかく面々手前より諸事急度相嗜不申候而は、組中之直り可申道理に而無之被思召候條、此段常々無油斷相心得尤に被思召候。此外御物語之品二時計御咄被遊儀共失念多、其上承違候所、口上に物語仕分は不及是非候。御意不被成所、存違候而記置候へば、惶多奉存に付、覺書調置不申所に、同廿九日志摩覺書仕置候様申候に付、明る卯正月三日之晚有増如此書付申候。定而承違共多可有御座と惶多奉存候得共、先調置之所如件。

卯正月六日

五 諸組頭に被仰渡之覺

延寶三年卯三月廿五日諸組頭何茂御縁頼に而左衛門殿被仰渡之趣有之、以後八半時過何茂御前に被召出被仰渡覺

一、今度新番之歩行頭被仰付候。家中侍共せがれ・弟など懸り人多、勝手不如意に被思召に付、或與力・新番之歩射

手・異風・書物役など望申もの候はゞ、尤器量により可被召出候條、連々を以承置書記、年寄共迄可相違候。尤俄承立候首尾に茂無之被思召候。新番之徒、非岩乘成ものなどは成間敷儀に候。左様に可相心得候。

一、年内被仰渡候通、組中介抱心に可入儀に候。去共唯今迄は名跡之息無之跡目斷絶、或致老衰可頼方無之、及飢寒可申ものなど候而も、其分致置申儀も有之候。向後左様之もの有之候はゞ、其趣具に承立、言上可仕候。

一、舊冬たとへに被仰聞候侍之筋目を不失、支配可仕儀勿論に候。病氣に付上京又は入湯願候節、醫者添書、并病氣に付役儀斷申時分誓紙杯取候儀、向後は無用可仕事。

一、組々せがれ・弟等、最前より御定之通、他國に遣候儀無用被仰出候得共、唯今新番などに茂可被召出候候へば、彌不得御内意他國に遣候儀可致無用候。去共其段茂、會而弟・末之せがれ杯仔細而他國などに遣候儀無用与は不被思召候。大概他國に遣候儀、可致遠慮事に被思召候事。

一、組中御留守中令死去刻、唯今迄は遺物差上候迄は不達御聽候得共、死去人早速不達御聽候得ば、御自分御扣之侍